

序

この10数年、動物の繁殖生理学に関する研究活動の進展、繁殖成績を向上させるための様々な技術の開発・薬剤の応用などの努力が積み重ねられてきた。それらの個別の成果は関連機関誌や雑誌で広く取り上げられ、活用されていることはよく知られている。また、各種講習会において、牛群の繁殖成績の向上を目的とした話題が関係者を対象に提供されていることは喜ばしいことだ。しかし残念ながら、これらの成果を1冊の書籍として取りまとめたものは最近出版されてはいないと思う日々を過ごしてきた。

そのような中、『日めくりマタニティブック』（技術評論社）に出会った。ロンドンの産科医師、マギー・プロット氏が書いたものの翻訳本である。人の受精から出産に至るまでの280日間の、①すこやかな妊娠生活、②マタニティ日めくり、③陣痛と分娩、④新生児との生活、⑤よくある不安と問題を取り上げたものである。

中核となる部分では、妊娠過程を1日ごとにみて、女性の体の中でどのような変化が起こるかが詳しく説明されている。また、胎児が子宮の中でたどる成長過程について画像を示して興味深い所見が紹介されている。陣痛・分娩の章では、分娩の過程が一通り説明され、新生児が生まれてからの2週間注意すべき留意点について大まかに書かれている。そして、関連分野の専門家である助産師、内科医、産科医、小児科医の専門知識、経験、情報の提供を受けての集大成となっている。

これを読んで、是非、獣医繁殖学の副読本として、『牛の日めくり』とまではいかないまでも「週めくり、あるいは月めくりマタニティブック」が出版できないかと考え、獣医学・家畜生産学関連の諸先生、生産現場で臨床繁殖の診療に携わっている獣医師諸兄の賛同を得て、執筆いただいた。

ポイントは、①妊娠に至る受胎のプロセス、②妊娠1か月（1日～1か月）の変化と特徴、③妊娠初期（1か月～3か月）の変化と特徴、④妊娠中期（3か月～7か月）の変化と特徴、⑤妊娠後期（7か月～9か月）の変化と特徴、⑥分娩期の特徴と管理、⑦産後のケアである。第1章の内容は、牛の発情発現、発見と排卵の予知、適切な授精タイミング・プログラムから始まり、卵管内での受精の瞬間、受精卵の発生、受精卵の細胞分裂と胚への発育・子宮への下降、着床、受精卵（胚）移植のタイミングについても網羅し、この間の妊娠牛の卵巣の動態、子宮内の胚発育と胚死滅を試験成績や臨床所見をもとに解説している。第2章～第5章では妊娠牛の体調変化と飼養管理、子宮内胎子の成長と変化、流産胎子の特徴に関してよく説明している。第6章～第7章では、母牛の分娩前後の飼養管理、特徴・変化および適切な出産管理と助産、新生子の適切な健康管理および死産例の特徴を紹介し、最終章では妊娠牛に対するワクチン接種の具体例を丁寧に説明している。これらはすべて、臨床現場の関係者にとって、役立つものといえる。

『牛のマタニティハンドブック』は近年の牛の繁殖生理学に関する知見の集大成であり、産業動物の臨床現場において得られた豊富な診療経験が展開されている。また、牛の生産性・受胎率向上に資する様々な診療技術および各種薬剤の応用方法に関する紹介は刮目に値するものとなっている。

本書は、牛の臨床繁殖分野で活躍している大勢の関係者に貢献できるものとなるだろう。特に将来、産業動物関連の職域で優れた獣医師として活躍しようと望んでいる学生諸君の「獣医繁殖学」の副読本として、活用されることを念願する次第である。また、多くの臨床獣医師が臨床現場で必要・重要な臨床繁殖上の諸検査や、牛の生産性を阻害する繁殖障害の防除・治療に不可欠な技法習得の参考となるよう願うものである。そして牛の繁殖性向上のベースとなる飼養管理に関して学ぶものとなるよう期待して止まない。さらに生産農家に信頼される手持ちの読本として活用され、牛の受胎率向上に励んでいる人工授精師や、関係機関諸氏の貴重な参考書として利用されるよう期待している。

最後に、『牛のマタニティハンドブック』の企画に賛意を示され、出版することに賛同下さいました、文永堂出版株式会社に心から感謝申し上げます。